The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカの中学校における異文化理解教育 : カリフォルニア州の事例から
Author(s)	中橋, 真穂; 義永, 美央子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2012, 16, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第16号（2012）

アメリカの中学校における異文化理解教育[1]
ー カリフォルニア州の事例から ー

中橋　真穂*・義永　美央子**

要　旨

グローバル化が進む中、異文化理解教育が益々重要になってきている。そこで、世界有数の多文化国家であるアメリカの中学校で異文化理解教育に関する調査を実施した。その結果、中学校での異文化理解教育に関するカリキュラムや指導方法、教師の意識、また、中学生が実生活で様々な異文化に接触している実態と、それらに対する寛容な態度が明らかになった。

【キーワード】異文化理解教育、アメリカ・カリフォルニア州、インタビュー調査、フィールドワーク、多文化社会

1　はじめに

現代社会におけるグローバル化の進展に伴い、多文化共生、異文化理解が喫緊の課題となっている。これについて、国内外で国際理解教育や異文化理解教育の理念の検討、政府や教育委員会の方針の分析、教育課程の編成に関する提案、教育実践の報告などが行われてきた。今後、異文化間の交流がますます増える中で、各文化に関する知識を習得するだけでなく、多様性を知り、尊重する態度を育む国際理解教育、異文化理解教育がさらに重要となってくると考える。そこで本稿では、世界有数の多文化国家であるアメリカでの異文化理解教育[2]に関する調査を実施し、現状を報告する。

本調査では、長い移民の歴史を有するアメリカの中でも特に多様な人種・民族が集まるカリフォルニア州にある中学校の現状を調査した。異文化理解教育に関し、どのような教育方針のもとで、教師はどのような考えを持って生徒たちに接しているのか、また生徒たちは授業や日常生活を通じて何を学び、どのように異文化に向き合っているのかについて、教師に対するインタビュー、および、学校でのフィールドワークの結果に基づいて検討する。

2　アメリカ・カリフォルニア州の教育の特色

アメリカは州によって教育制度が異なるが、カリフォルニア州にある一般的な公立の学校の教育概要は、表1のようにまとめられる。日本での高校3年生にあたる12年生までが義務教育とされ、この期間の学費はすべて無償である。

義務教育期間	1年生～12年生（小学校～高校）
学級ごとの生徒数	1～3年生（小学校低学年）までは20人前後、4年生以降は30人前後。
カリキュラム	標準的な授業科目：英語、数学、社会学、米国歴史及び地理、世界史、文化、政治経済、生物、自然科学、体育、外国語
義務教育期間の学費	無償
外国人に対する言語特別指導	英語が母語ではない生徒が1人でもいる場合は、ESL指導が義務付けられている。

表1　カリフォルニア州の教育概要（外務省HP）

また、人種・民族の多様なカリフォルニア州では、全体の初等・中等学校に通う生徒の6人に1人が外

*大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程
**大阪大学国際教育交流センター准教授

国生まれ、3人に1人は家庭で英語以外の言語を話し（中島 1998）、常に異なる文化、言語、価値観の間での問題や、教育現場における差別や習熟度の差などが問題になってきた。その対応策として1970年前後から、文化多元主義や多文化主義をもとにした、多民族教育や多文化教育が注目されるようになる（川崎 2011）。1980年～1990年代になると、民族構成の急激な多様化、人種・民族、ジェンダー、階級をめぐる学問的な発展などを背景にして、多文化教育の研究と実践が盛んになり（松尾 2007）、校区や各学校の目標の中に、多文化共生、異文化理解に関する内容が取り入れられるようになった。現在、英語が母語ではない生徒が学校に1人でもいる場合は、ESL（English as a second language）指導の実施が義務付けられている。

3　調査

3-1　調査目的

本調査は、子どもから成人への重要な橋渡しの時期を過ごす中学生に焦点を当て、以下の2点について明らかにすることを目的とする。

（1）カリフォルニア州の中学校では、どのようなカリキュラムのもとで異文化理解教育が実施されているのか。

（2）教師は、異文化理解教育の実施にあたって、どのような点に配慮しているか。また、生徒は異文化に対してどのような経験や態度を有しているか。

3-2　調査方法

本調査では、3-1の調査目的に基づき、2011年7月～8月、10～11月の2回にわたり、カリフォルニア州、サンフランシスコの郊外に位置するG中学校、L中学校の2校でインタビューおよびフィールドワークを行った（学校の概要については4-1参照）。はじめに、G中学校に勤務する教師3名（フランス語担当1名、地理担当1名、世界史担当1名）、L中学校に勤務する教師1名（スペイン語担当）に対し、半構造化インタビューを英語で実施した。次に、フィールドワークとして両校で行われたフランス語、スペイン語、地理、米国史の授業に参加し、実際の授業がどのように実施されているか、生徒はどのような様子かを観察した。

4　結果

4-1　2校の概要

G中学校は全校生徒約700名、そのうち外国籍（ネパール、台湾、ノルウェー、メキシコ、ペルー、南アフリカなど世界各地から）の生徒が約10%を占めている。L中学校は全校生徒約900名、そのうち約4%が外国籍（フィンランド、ドイツ、メキシコなど同じく世界各地から）の生徒である。また両校とも、本人はアメリカ国籍ではあるものの、両親は他国からアメリカへ移住してきた生徒も多く、文化背景は様々である。

2校とも異文化理解のみに特化した科目はないが、2校がある校区全体（小学校～高等学校）の目標の1つに、「ダイバーシティ：学生は、アカデミックな、あるいは社会での、様々な経験を通して、私達のコミュニティ、州、国、そして世界の多様性をより意識し、人々の違いを正当に評価し、共通性を理解することを学ぶ」ことが掲げられており、多様性、異文化理解を校区の目標としている。そのため、2校とも教科教育やさまざまな活動の中で、これらの目標が常に念頭におかれている[3]。

以下、教科教育（特に外国語科目）、課外活動、海外からの生徒の受け入れにおける異文化理解教育の現状について、インタビューデータを適宜引用しながら紹介する。また、異文化に対する生徒たちの態度についても検討する。

4-2　教科教育（外国語）における異文化理解教育

本節では、カリフォルニアの中学校における教科教育、特に外国語科目のカリキュラムと目標について概観したのち、外国語の授業における異文化理解教育について紹介する。

4-2-1　外国語科目のカリキュラムと目標

California Department of Education によると、カリフォルニア州の中学校では外国語クラスが開設されているものの必須ではなく、高校終了までに演劇か外国語のいずれかを最低1年間受講することが必須となっている。さらに大学に進学する場合は中学～高校の間に最低2～4年の外国語受講が必須となっている。ただし、カリフォルニア州内でも郡や校区の方針や予算によってカリキュラムの詳細や、教授言語などが多少異なる。特に選択出来る外国語の種類などは、それぞれの言語を教えられる教師の有無や予算によって異なり、また、学校施設なども地域の予算によるところが多く、裕福な家庭の多い地域はより充実した教育を受けられるといった差がある。外国語クラスは、通常1日1コマ（45分）、週5日（月～金）実施される。

今回調査した学校の場合、G中学校では、外国語のクラスとして、フランス語、スペイン語、ドイツ語、日本語、中国語が開設されている。外国語クラスの目標は、「言語と文化の繋がりを理解し、文化ごとの世界観を知り、地域や世界の一員として貢献することに価値を見出す。様々な状況において、文化的に適切な方法で行動することによって、文化によって異なる様々な見方や理解の仕方を習得する」とされており、言語学習だけではなく、異文化理解に重点を置いている。L中学校でも同様に、フランス語、スペイン語、ドイツ語、日本語、中国語の授業が開設され、それぞれの外国語のカリキュラムに「その言語の文化を学ぶ」ことが目標として設定されている。

4-2-2　外国語教師の異文化に対する意識

本節では、インタビュー調査の結果をもとに、教師がそれぞれの授業で何を意識し取り組んでいるのかについて検討する。

今回調査した2校では、いずれも文化がカリキュラムの一環として重点的に扱われている。そして、実体験を重視する、当該文化の経験者を教室に招待する、プロジェクト学習を行うなどして、リアリティのある学習環境を提供し、生徒の自発的な学習を促している。また、近隣にある大学からスペイン語圏に留学した大学生を招待するなど、周囲の大学との連携が観察された。

【フランス語のクラス（G中学校）】

What I try to do in my classroom is to put the focus on culture so we talk about French culture...and in fact that it's not even considered "oh by the way", it is part of our curriculum. I try as much as possible when I'm teaching culture to have them experience the culture. I do things that they do in France. For example, when my class starts, my students stand up and greet me because that is what they do in France, not in the US. So part of my teaching of culture is for the students to expect to do things in the French way like this room is France. And I also give them an opportunity to explore so they have research projects about the culture. They love doing these projects because they can learn so much more. So I think learning about cultures is exciting for students.

（フランス語のクラスでは文化に焦点を置くようにしており、（中略）言語学習の合間に、豆知識として文化紹介をするのではなく、カリキュラムの一環として取り入れています。クラスでは、生徒にその文化を経験してもらうようにしています。フランスでするように、授業の始めに起立してあいさつするなど、アメリカではしないことなどをさせたりします。つまり私の文化を教えることの一部として、この教室がフランスであるかのように、フランスでのやり方をしてもらっています。また、自分たちで出来るだけ探求する機会を与えるため、文化に関するリサーチプロジェクトをします。彼らは多くのことを学べるので、非常にプロジェクトが好きです。学生にとって文化を学ぶことは、とてもワクワクすることなのです。：訳と下線は筆者、以下同）

インタビュー：2011/8/29、フランス語教師

【スペイン語のクラス（L 中学校）】

We do a lot of cultural things. We sing a song in Spanish and have countries presentations so the students can pick Spanish speaking countries and do their presentations. The kids love the presentations. I usually like to try bringing someone from the university who talk about going abroad and studied in another country. Nothing is probably more interesting and surprising than sharing real experience and stories in different cultures. It would be the best way to actually experience different cultures or the way of their idea, but not everyone can do that so I try to introduce real things as much as I can.

（クラスでは文化についてよく取扱います。スペイン語の歌を歌ったり、スペイン語圏の国に関するリサーチを各自し、発表をしてもらったりします。生徒たちは他の生徒の発表が大好きです。近くにある大学から他国に留学した経験のある学生を招待して、その国について話してもらうこともよくします。リアルな体験、ストーリーほど生徒たちにとって興味を湧き立てられ、驚かされることはないかもしれません。異なる文化、価値観などは実際に体験するのが一番でしょうが、皆が出来るわけでもないので、体験した人の話などを通して可能な限りリアルにしようと心がけています。）

インタビュー：2011/9/2、スペイン語教師

4-2-3　授業の実際

本節では、実際に行われた授業の事例として、筆者（中橋）が見学した G 中学校のフランス語の授業を紹介する　（視察日：2011/11/30）。

この授業では、まず生徒たちがグループに分かれ、フランスの各地方の食べ物を調べ、実際に作り（写真1）、皆に配り、食べてもらいながらその食べ物の由来や材料、作り方などを紹介した。その日はクレープとドーナツのようなもので、発表するグループが作ったそれらを食べながら皆、興味津津に聞いていた。発表の前に、先生が「語学の時間になぜ食べ物について発表すると思いますか」と生徒に問いかけると、発表を担当した生徒は、「その言語の学習を通して文化や習慣なども学びます。中でも『食べること』は私達の人生の楽しみの大きな部分を占めるのでとても重要だからです」と答えた。

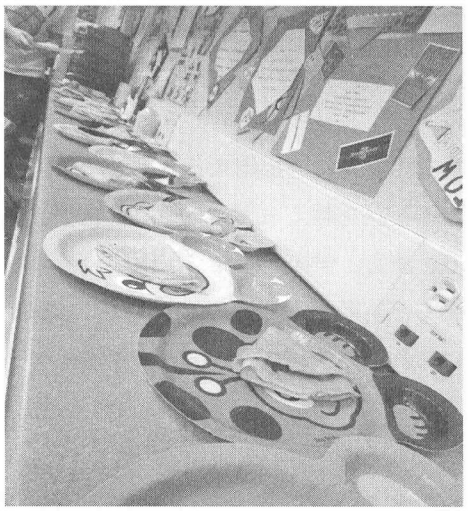

写真１　発表のために生徒たちが作ったクレープ

写真２　生徒たちが作成したポスター
（世界の食べ物について調べたもの。教室の外壁一面に張られていた。）

「食べること」は生徒たちにとって最も身近であり、最も興味のあることのひとつといえる。担当クラスの教師はインタビューで、食べ物を紹介する際には、その食べ物が食べられるようになった理由として、その土地の気候、習慣、歴史、名前の由来といった言語などが絡んでくるため、食べ物を通して文化を知ることができ、同時に、国や文化が違っても、おいしいと思

う気持ちは同じといった心を育てることも出来る、と答えた。カリキュラムの目標にあったように、「食」を通して異文化を知り、そして尊重する心を育てるというように、外国語の授業において異文化理解に重点が置かれていることが明らかである。また、生徒は進んでプロジェクトを実行し、発表を聞く側の生徒も熱心に聞き入っていた。

このような授業は、生徒の文化的多様性を尊重する教師を養成するための政策やプログラムがもとになっている。1970年代以降、文化の多様性を教員養成プログラムの中に反映させる州レベルの政策が発展していった（松尾 2007）。例えば、カリフォルニア州の政策には、「性、民族、障がいの状況の異なる児童生徒に対するこれらの実践の応用について検討する」「第二言語習得に関する研究、あるいは、言語の異なる学習者への効果ある教育アプローチの実践を含む多文化の調査や経験に従事する」「教師志望学生と民族、文化、性、言語、社会経済上の違いを含む児童生徒との適合性、およびこれらの児童生徒を指導する能力を有する」（Gollnick 1995）などが教師を志望する者に求められている。また、教師志望者にとって、自分とは異なる児童生徒の文化的背景を理解するのに最も有効な方法は、「異なる文化を実際に体験すること」であるとし、異文化を経験するプログラムが多数実施されている（松尾 2007）。実際、G中学校のフランス語教師は、大学時代にフランスへ留学、教師になった後も教師交換プログラムを通して1年間、フランスで英語を教えた経験を持つ。学生としてフランス語を学習した経験、フランスで教師として英語を教えたという両方の経験は、教授法や学習法、異文化教育といった面で、現在の授業にも非常に活きているとのことだった。L中学校のスペイン語教師も、大学時代にスペイン語圏へ留学し、そこでたくさんの異なる文化、地域により異なるスペイン語を学び、帰国後も様々な国を旅行した経験を持ち、それらを写真などを使ってスペイン語の授業の初日に必ず生徒に見せることで、生徒の異文化への関心を高めるという。このように、実際に教師が異文化を体験することで、異なる文化背景を持つ生徒への配慮、また生徒に対する異文化理解教育への貢献が期待できるといえる。

4-3 課外活動等における異文化理解教育

今回調査した2校では、授業以外のイベントや昼休みの活動、クラブ活動を通しても生徒たちの異文化理解を促す取り組みが実施されている。これらの活動では、「食」や「若者の流行」など、いわゆる伝統的な文化ではなく生徒たちの実生活に結びついた親しみやすいテーマを取り上げ、中学生が異文化をより身近に感じられるように配慮している。これらの内容は、海外からの転入生受け入れ（後述）の際にも会話のきっかけとなりうるものである。

【昼休みの取り組み】

During lunch, we play all the different types of music from different countries. We try to keep it within popular cultures because some traditional are interesting but teenagers are more interested in what other teenagers do. Also when they meet a new student from other country who is just joining us, they might have a point of conversation right away. And I think that helps new students when they arrive, they feel more welcomed.

（昼休みには色々な国の音楽を流しますが、現在流行っている音楽にするようにしています。なぜなら、伝統的な音楽もいいですが、ティーンは、他のティーンが何をしているかの方が興味があるのです。さらに、海外から生徒が転入したときに、会話のきっかけとなるでしょう。新しい生徒は歓迎されていると感じると思います。）

インタビュー：2011/8/29、フランス語教師

アメリカの中学校のクラブ活動は、共通の興味を持つ学生たちが集まり、顧問の先生を見つけ、自主的に活動をする。G中学校の場合、“Japanese anime club” “Korean food club” “International club” などがあり、様々な文化をシェアしたり、コミュニティに参加したり、インターナショナルデイに文化パフォーマンスを披露したりしている。また、L中学校では、

ヒスパニッククラブが活動している。アメリカ全土で英語を第一言語としない生徒の大半（76.6%）はスペイン語を話す。彼らは主にメキシコから移住してきたヒスパニック系であり、近年、カリフォルニアでの増加が顕著である。貧困率が25%と高く、教育水準が標準を下回っていることが問題となっている。進学率も比較的低いのが現状であり、その対策の一環として、また、ヒスパニック系の文化理解も目的として、L中学校では、スペイン語の教師がヒスパニッククラブの顧問となり活動している。こうしたクラブ活動においても、近隣にある大学との連携が見られる。

【クラブ活動（ヒスパニッククラブ）】

Since we have a large Hispanic population, we have a Hispanic club. It's mostly to raise awareness of Hispanic culture. Also our goal is focused on going to college because here, we have lower percentages of Hispanics going to college. So we take them to the university and we do tours.

（ヒスパニックが多くいるので、「ヒスパニッククラブ」があります。主に、ヒスパニック文化の意識を高めるためです。例えばヒスパニックの食べ物を食べたりします。また、ヒスパニック系の生徒は大学進学率が低い傾向にあるので、近隣の大学へのツアーを企画し、実際に大学を見せることで進学率をあげることにも焦点を当てています。）

インタビュー：2011/9/2、スペイン語教師

またG中学校では、フランス語・ドイツ語・日本語を学習する生徒のための、夏休みなどを利用した1カ月程度の留学プログラムがあるほか、街のレストランの協力を得て、世界各国の料理を学校で食べるお祭り（international day）が年1回校内で開かれる。ネパール、インド、日本、中国、スリランカ、エジプト、サウジアラビア、ベトナム、タイ、韓国などの料理が並び、様々な文化のパフォーマンスが披露される。

【インターナショナルデイ】

Our purpose of the day is to really promote understanding world culture. We always ask some local restaurants to prepare food and bring them onto campus to give the students opportunity to try food that maybe never tried. The students love it…. So, they are exposed to different foods so when they see another student on campus eating different food, they wouldn't say "eh, what's that?" They can appreciate each other's lunches when they come with ones that are different. In the afternoon, we have an assembly that promotes and gives them experiences to music and dances from different cultures. We also invite groups from the university or local groups to perform on our campus.

（インターナショナルデイの目的は、世界の文化への理解を促進することです。地元のレストランに頼んで食べ物を準備し、学校に持ってきてもらい、生徒が食べたことのないものを試す機会を与えます。(中略)食べたことのない食べ物を試したりすることで、学校で他の生徒が異なるランチを食べているのを見ても、「何それ？」と言わず、互いのランチを尊重できます。午後は、例えば大学や地元のグループを招待し、様々な文化の音楽やダンスのパフォーマンスをしてもらいます。）

インタビュー：2011/8/29、フランス語教師
（インターナショナルデイ考案者）

4-4　海外からの生徒の受け入れ

多文化・多民族国家アメリカにとって、海外からの生徒を受け入れる体制を整えることは、長年の課題となっている。移民の増加に伴い、英語以外の言語を第一言語とする人たちが年々増加しており、2000年の国勢調査では全人口の18%にのぼっている。2001年度は、公立学校に在籍する英語能力が不十分な生徒の数は470万人、全生徒の9.8%に相当し、その中でもカリフォルニア州は言語的マイノリティである生徒を最も多く抱える州である（ソニア 2009）。彼らが話

す言語は400あまりにのぼり、生徒の大半（76.6%）はスペイン語を話す。以上のような多様な状況下で、上述のように、英語が母語ではない生徒が１人でもいる場合は、ESL指導が義務付けられており、学校、先生、同級生、地域、近隣の大学など様々なリソースを活用してサポートを行っている。

今回の調査協力校でも、英語サポート教室や放課後のクラスが開設され、海外からの生徒のみならず、現地の生徒も参加しており、学習補助の場としてだけではなく、交流の場としても重要な機能を果たしている。G中学校では専属の先生が常駐し、英語の授業や通常授業の補助、宿題のサポートなど、１人ひとりの生徒の状況により臨機応変に対応している。またL中学校では、外国語の授業、クラブ活動などと同様に、近隣の大学教授、学生との連携も有効活用している。

【サポート教室の様子】

We have a program and you will find a lot of international students that go there and it's an after school program and it's actually also a 7th period program so they can take it as a class as well where they can get help on their English and homework. It's not just only for international students and it's a smaller class so they can have the opportunities to make some friends in a smaller environment and get some helps if they are struggling. They could also exchange their cultures there. The person who runs it is actually a professor from the university, and they get students from the university to volunteer to be tutors.

（英語サポート教室のほかに放課後に特設されたクラスがあり、海外からの学生が多く参加しています。正規の授業の７時間目として、履修することも出来ます。内容としては、英語のサポート、宿題のサポートなどです。学習支援にもなりますし、海外からの生徒だけでなく、一般の生徒もいるので、小さめのクラスの中で友だちも出来やすいでしょう。異文化交流の場でもあります。担当の先生は、近隣の大学の教授です。また、その大学の学生がチューターとしてボランティアで来ています。）

インタビュー：2011/9/2、スペイン語教師

また、インタビューから明らかになった海外からの生徒を受け入れる教師の対応の特徴として、第１に、サポート教室に専属の教師はいるものの、そこに留めておくのではなく、他の生徒にサポートを頼むなどし、生徒同士の交流から英語を学び、学校生活に馴染むよう心がけている点があげられる。

【英語サポート教室】

We try not to make them stay at just the English support classes. Since we think it's more important that students support each other, I ask students who are native English speakers that sit next to the students to translate and help. In that way, students can learn English by interacting each other.

（英語サポート教室に留めておくのではなく、生徒同士の教え合いを大切にしているため、英語ネイティブの生徒にサポートをお願いし、生徒同士の交流を通して英語を学んでもらえるように心がけています。）

インタビュー：2011/8/29、地理教師

第２の特徴は、海外からの生徒に対し、彼らの国の文化紹介をお願いする際にはまず個人的に頼み、了承を得るなど、必ずしも皆に文化を紹介したいとは限らないであろうと配慮したり、冬休みの呼び方や、昼食の話題など、教師は多文化社会を実現するうえで発言にかなり気を付けたりしている点である。多様性を互いに認め、自由な発言が尊重されていると捉えがちだが、使い慣れた言い回しや、人々がしてしまいがちな外見からの判断などをしないよう、教師会議などの学校全体、そして個人レベルで心がけている。

【母国の文化紹介について】

I will talk to the student privately first if I want international students to share their cultures at my classes, "would you mind

sharing..." and if he or she said "yes" then I set a time to let them do the presentation of their countries".

（外国からの転校生に対し、母国の文化紹介などは、まず個人的に相談してみて本人の了承が得られれば時間を設けてしてもらうようにしています。）

インタビュー；2011/8/29、世界史教師

【多様性に対する教師の心得】

In the united states, we must always be conscious of our language so that it's inclusive of cultures and not exclusive. For example, we would never want to say "Christmas break" because not everyone is a Christian. We should be saying "Winter holiday". We would not make assumptions of what someone might have for lunch. We would necessarily say "what did you have in your sandwich today?", but rather "what did you have for lunch today?" because we shouldn't assume that all students eat sandwiches. And even skin color...If a student walks into your class room with darker skin and darker hair, and may look to be perhaps Hispanic, you cannot assume that they speak Spanish just because they look like they might Latino. We sometimes make this mistake when we look at someone's race or appearance and then we assume that they speak a certain language or have some cultural heritage. So every year we try to remind ourselves not to do this because it could be very confusing for the student and non sensitive on the teachers part. All of these things I think we are reminded of in our teacher conferences and when we prepare our lessons we try to keep in mind.

（アメリカでは、ある一部の文化だけを排除せず、全てを含むように生徒に対しての言葉の使い方にとても気をつけなくてはなりません。例えば、全員がクリスチャンであるわけではないので、「クリスマス」と言うのではなく、「ウィンターホリデー」と言うように、また、「今日のランチには何サンドイッチを食べた？」と決めてかかるようなことはせず、「ランチに何を食べた？」と尋ねるようにしています。なぜなら誰もがサンドイッチを食べると言うわけではないからです。肌の色もそうです。（中略）暗めの肌と髪の生徒が教室に入ってきたとしても、ヒスパニックだと思い、スペイン語を話すだろうと予測してはいけないのです。私たちは時々このような間違いをします。見た目から彼らのエスニシティを判断し、特定の言葉を話し、特定の文化を受け継いでいると考えてしまうからです。ですから毎年、そうしないように心がけてきました。生徒にとって困惑することになり得るし、先生は不注意であるとされます。教師会議や学期の準備期間毎に、これらのことを心がけるようにしています。）

インタビュー；2011/8/29、フランス語教師

4-5　異文化に対する生徒の態度

生徒は、通常、異なる文化圏から来た転入生に寛容であり、中でも以前転入してきた生徒は、新しい転入生の気持ちを理解し、積極的に交流しようとしている。

【受け入れる側の生徒の態度】

Usually many students are interested in meeting someone new and helping to show them around. The students who were also new a couple years ago are particularly sensitive and try to help new students probably because they know their feelings.

（受け入れる側の生徒は通常、新しい生徒に会うこと、学校を見せて回ったりすることにとても興味を持っています。特に、以前に転入してきた生徒は気持ちを理解出来るのか、そういったことを新しい生徒に積極的にしてあげたりしているようです。）

インタビュー；2011/8/29、フランス語教師

こうした態度は、学校の教育や個人の経験のみならず、地域の環境によっても育まれているようである。２校が立地する地域には海外からやってくる人々も多

く、人種や文化を超えた交流が日常的に行われている。こうした地域性や、文化を異にする友だちと接する日常から、生徒の多くは異なることが当たり前の状況だと捉えている。

【生徒の周辺環境と態度】

I would say open minded, they want to learn, because they realize how small the world is getting and how we all impact each in so many different ways. This town I think is a pretty well-traveled area so being open minded to different cultures is good for them. I think their opinions come from home, here, we have so many international students: a Chinese kid playing with a kid from India whose playing with a kid who was born here with white parents and they all sit and play together. And for them, it's not a big deal. For them it's very organic how merged societies are here. It's such a mixture.

（異文化に対して、オープンマインドで、学びたいと思っています。なぜなら、彼らは世界はどんどん小さくなっており、互いにかなりの点で影響しあっていると感じているからです。ここの地域的なことですが、国際色に溢れている地域なので、彼らにとって異文化に対してオープンマインドなのはいいことだと思います。たくさんの海外からの生徒がいるので、学校だけではなく、家に帰ったら中国人の生徒がインド人の生徒と遊んだり、この町で白人の両親から生まれ育った生徒と遊んだりしますが、それは彼らにとって、大した問題ではないのです。ここは、非常に異文化が混在し、多様です。）

インタビュー：2011/8/29、地理教師

しかし一方で、例えば食べ物などに関して、自国の文化を一番とする生徒の存在を指摘する。教師は学校など身近な例を取り上げ、異なることが必ずしもネガティブなことではなく、それぞれのやり方であると捉え、尊重する心を育てるようにしている。

【生徒の異文化に対する態度】

We have a lot of students that are very accepting and we have some students that are not accepting. Some students feel that our customs in the United States are the best. Food for instance, there are definitely things that you can say to people eating such as "eh, that's so gross!" which is not very accepting. It is always hard for them to understand that it is different. We do talk a lot about how schools are different in other counties. For example, the way of grading is even different. They get surprised when they hear those things, and I always try to teach them that "different doesn't mean that it doesn't work". That's just their way.

（多くの生徒は異文化を受け入れる姿勢を持っています。そうでない生徒もいます。「アメリカの文化が一番だ」と感じている子もいるようです。例えば食べ物に関して、馴染みのないものを「気持ち悪い」と言って受け入れない生徒もいます。常に、彼らにとって違いを理解することは難しいのです。海外での学校の違いについてもよく話します。学校の成績の付け方の違いなど、生徒はそういうのをきくと、とても驚きます。そして、「異なること＝うまくいかないこと」ではなく、それぞれのやり方なんだということを伝えるようにしています。）

インタビュー：2011/9/2、スペイン語教師

5　まとめ

以上、インタビュー調査、フィールドワークから得られたデータに基づき、数点のトピックに焦点を当てて報告した。そこから、学校、教師、地域、近隣の大学などが協力し合う環境で、生徒たちは異文化を学び、また実生活でも異文化を経験し、通常はそれらに対し寛容な態度であるということが明らかになった。

今回の調査で紹介した「異文化理解」の中心は、「アメリカ国内の異文化」であり、文化を異にする身近な人々に対する理解と、共生の心を育むことを目的としている。翻って日本の現状をみると、日本の外国

人登録者数は208万5千人（総人口の1.63%：法務省，2007）と、多様性の度合いがアメリカに比べると低い（川崎　2011）ため、生徒たちが身近な異文化をイメージし、受け入れることは難しいかもしれない。しかし、日本在住の外国人は増加傾向にあり、現在の中学生が社会に出るころには、日本国内もより多様化している可能性が高いことから、「国外」への異文化理解はもちろんのこと、「国内」の、身近に存在する異文化への理解を育む教育が今後ますます重要となってくると考える。またその際、地域や大学との連携、教師の意識改革、施設の充実、イベントやクラブの企画などを通して実際に異文化を体験する機会を与えるなど、リアリティのある異文化理解教育が必要となってくるであろう。

一部ではあるが、カリフォルニア州にある2校で取り組まれている異文化理解教育の現状を紹介した。得られたデータを参考に、多様性を認め、尊重できる子どもを育てる異文化理解教育を再検討したい。

注

1. 本稿は博報財団「第6回児童教育実践についての研究助成事業」によって実施された「中学生の国際理解意識に関する比較研究－日・中・米を対象として－（研究代表者：義永美央子、共同研究者：潘英峰・中橋真穂）」の研究成果の一部である。また、調査の実施にあたって、平成23年度大阪大学研究支援員制度の支援を受けた。
2. 今回のアメリカでの調査の場合、主にアメリカ国内の異文化に対する理解を取り上げるため、本稿では「国際理解教育」ではなく、「異文化理解教育」という用語を用いる。
3. このような姿勢は、たとえば教室内の備品や装飾にも現れている。今回調査した2校では、日本のように学級単位での教室を与えられているわけではなく、各教科に教室が割りふられており、生徒は時間割に従って、時間ごとに各教室を移動する。各教室のレイアウトや装飾は各教科の教師の裁量によるが、いずれの教室も、万国旗を飾ったり、複数の地球儀を配置したりして、世界の多様性を認識させるようになっている。

参考文献

川崎誠司（2011）『多文化教育とハワイの異文化理解学習』ナカニシヤ出版

ソニア・ニエト（2009）『アメリカ多文化教育の理論と実践』明石書店

中島智子（1998）『多文化教育』明石書店

松尾知明（2007）『アメリカ多文化教育の再構築』明石書店

法務省（2007）「平成18年末現在における外国人登録者統計について」平成19年5月プレスリリース

外務省ホームページ http://www.mofa.go.jp/mofaj/（最終アクセス 2012/1/30）

California Department of Education ホームページ　http://www.cde.ca.gov/index.asp（最終アクセス2012/2/10）

Gollnick, D. M.(1995) “National and state initiatives for multicultural education,” In J. A. Banks & C. A. M. Banks (Eds.), *Handbook of research on multicultural education.* New York, Macmillan.